２０２３年度

群馬県立女子大学

文学部英米文化学科後期日程試験

入学試験問題

小論文

注意事項

1　指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2　この冊子を開くと、問題が両ページに印刷されています。印刷に不鮮明な点があれば、手を挙げて監督者に申し出て下さい。
3　解答は、解答用紙の所定の欄に記入しなさい。

次の文章を読んで、あなたはどのように考えますか。あなたの考えを６００字程度で書きなさい。

人間が世の中の何たるか、人と人との関係がいかなるものか、そして自分とは何者なのかについて理解し、認識しているのは物語によってである。産まれたばかりの赤ちゃんの時は泣くとミルクを飲ませてくれたり、オムツを取り替えてくれたりというアクション＆リアクションの対応関係を認知するにすぎないが、言葉を覚えるようになって来ると事象を繋ぎ合わせて、周りの出来事を一連の物語として理解するようになる。何をしたから褒(ほ)められたのか、何をすると痛い思いをするのか、何をしてはいけないのか等々、自分と周りの事象を「なぜなのか」「そしてどうなるのか」という物語様式で理解・解釈していく。使える言葉が増えて来ると“嘘＝物語(フィクション)”そのものまで作れるようになる。更には見たこともない、触れたこともない事象まで、それまでに得ていた事象に関する知識・経験を組み合わせて、即ち物語を作り上げて認知・理解しながら成長していく。

例えば子供は童話や絵本といった物語を通して社会のルールや価値観を身につける。イソップ寓話の「アリとキリギリス」の話を聞いて勤勉の価値を学んだり、日本昔話の「鶴の恩返し」の話で他者への優しさや返報の大切さを知る。子供が幼稚園や学校に行くようになると、そこで起きる事象、例えばだれかとケンカしたり、仲直りしたりといった出来事を自ら物語化して解釈したり、先生が物語化して諭してくれたりすることで人間関係や社会のメカニズムを学んでいく。このように人間は周りの事象を物語として認知し、「世界はどのようなものであるのか」と「自分は何者であるのか」を学習・探索しながら生きていくのだ。物語は人間にとって根源的な認知の方法論なのである。

言語の使用が人間を人間たらしめていると言われるが、実は言語を使用する生物は人間だけではない。物語こそが他の動物にはない人類だけの能力である。

猿が発する鳴き声のパターンはその群れの中で共有される意味を持つ。敵やエサの存在を教え合ったり、群れの統制を指示したりするのに多くの“言葉”が使われている。イルカやクジラは超音波を使って互いの名前を呼び合ったりしている。生物として進化のレベルの高い哺乳類だけでなく、ミツバチも羽音とダンスによって他のミツバチに蜜の所在や水源の場所を伝えたりしている。簡易的な言語によるコミュニケーションは多くの生物が行っているのであり、人間だけが特権的に言語を使用しているわけではない。

人間だけにしかできない言語の活用方法とは、他の生物が行っている簡易的なコミュニケーションでは扱えない虚構や抽象概念を含んで複雑に構成・創作される

「物語」を扱うことなのである。

波頭亮『文学部の逆襲－人文知が紡ぎ出す人類の「大きな物語」』(株式会社筑摩書房　2021年)